



1 ルールも、ヘルメットも、雪球製造器も、まちの人々が知恵を出し合い、試行錯誤を重ねて作りあげた。このまちで定められたルールは、国際ルールでもある 2 15年前の第3回大会告知ポスター。実行委員であった堀口氏自身が、広報宣伝に役立った／ポスター提供 昭和新山国際雪合戦実行委員会

堀口 一夫／ほりぐち かずお 1948年 社警町に生まれる。67年に北海高等学校を卒業後、堀口電気商会に入社。87年、堀口電気商会の法人化に伴い、代表取締役役に就任、現在に至る。おもな団体歴は、75年から社警町野球連盟会長、03年から社警町商工会会長、05年から社警町文化協会会長など。第9回昭和新山国際雪合戦より大会実行委員長。

## 選手たちの参加意欲も大会を推進する原動力

経ちました。責任者といつても、命令権があるわけでもなし。私にできることは頭を下げる。この大会は、町ぐるみのボランティアと企業や団体の協賛で成り立っている。みんな余裕があつて協力してくれてるんじゃないかと、忙しい合間をぬって、それぞれの役割を果たそうと頑張ってくれている。それを知っているから、実行委員の一人として自然に頭が下がりますよ」

うなりをあげて雪球が飛び交う。まずは、強烈な雪弾の応酬戦。その間隙を突いて、いつきに突進し、シェルターに体を潜める選手。壁に張り付く選手をめがけてフライ攻撃も容赦ない。バシッ！シェルターの角に当たって砕け散る雪球。流れ弾もギョラリ席に飛んでくる。目が離せない。

い。雪球は飛ぶ、コーチの指示も大声で飛ぶ。素手で挑む選手は、もう指先まで真っ赤だ。長いようで短い1セット3分。90個用意された1セット分の雪球がみるみる減っていく。「うまいチームは3分で90個の球を使い切るね。このチームは戦略がある。センターシェルターに2人張り付いているでしょ。援護射撃を受けながら、ダッシュして相手チームのフラッグを狙っていくはず」。堀口氏の解説で、思わず試合に引き込まれていく。訪れる前に想像していた試合よりは、シェルターに当たった雪球とともに見事に砕け散った。これはまさしくスポーツだ。しかし、普通のスポーツとは少し違う。みんな真剣に遊んでいる、のだから雪合戦。されど、誰がここまで「まじめな雪遊び」に進化すると予測しただろう。スポーツとしての雪合戦は、今や海を渡り、遠く北欧でも国際雪合戦ルールにのっとり、YUKIGASSENヨーロッパ選手権が練り広げられているという。

大会以降は190チームにまで膨らんで。今大会からは、一般参加のレベルアップを図るため、地区ブロック予選を勝ち上がった精鋭152チームが、本大会に出場できる体制を整えました。選手たちの参加意欲もまた大会運営の大きな原動力になつているといえるだろう。

## 知恵と行動力と雪球にかける思い

選手たちが昼食をとる大食堂へ行つてみた。階段わきに第1回大会からのポスターが展示されている。第3回大会のポスターに意外な人物を発見。雪球を両手に持ち、勝負を挑む眼光鋭い堀口氏、その人である。15年前の堂々たる体躯は、こう語っている「自分の住むまちのためなら、二肌脱、こうじゃないか」。そんな大それたことじゃなく、乗せられちゃつて。社警町発祥のスポーツが、まちの自慢になればうれしいと思つて。住んでいて誇りに思えるまちであつてほしいからね。小さなまちだけど、活性化していくのも衰退していくのも、二人ひとりの知恵と行動にかかっていると思つた。知恵、そして行動力、その証しがこのポスターだ。実行委員長として肝に銘じているのは、「前例にないことをやる」。毎回が、知恵と行動力の真剣勝負だ。今大会の開会式のあと堀口氏はこう語つていた。「開会宣言を聞くといつも、ああ、やっとなの仕事を終わったつて思う。大会の準備は前年の5月くらいからスタートしますからね。各方面への協力依頼に全力で走り回つて、スムーズに開催できる環境を整えるのが私の役割。だから私のゴールは、この開会式」。しかし、ある意味ではゴールはまだ先のような。雪合戦を冬季オリンピック種目に。その「夢」の開催に向けて、山あり谷あり。堀口氏のロングランは明日へとつづく。



昭和新山国際雪合戦大会

子どもの遊びを、大人が真剣に競う冬のスポーツとして確立したことは、雪国北海道にふさわしい文化といえる。各地でブロック予選が行われたのち、150を超える精鋭チームが、昭和新山ふもとのセンターコート決勝大会に集結する。